

Society at the Time of the Buddha

吉元 信行

一

近年、佛教を佛教以外の学問分野より研究しようとする試みがさかんに行われる様になったことは喜ばしいことである。この試みは、別の言葉では応用佛教学と呼ぶことができようか。もちろん、この中には、佛教学のように古くから研究されてきた分野もある。また最近では、佛教を心理学的見地からみようとすると佛教心理学も次第にその成果を示してきている様である。その他、今後、佛教を社会学・教育学・経済学・法学・数学・天文学等の様々な分野から研究しようとする未開の分野が無限に広がっている。

本書は、その中でも佛教社会学の分野に属する珍らしい研究である。後に詳しく述べるが、本書は社会学のみにとどまらず、それに歴史性を加味した、社会人類学の部門にまで足をふみ入れた実に先駆的研究なのである。その様なところに、本書は他に類を見ない大きな意義をもつと言わねばならない。

この様な問題について我々に与えられている唯一の資料はパ

ーリ聖典である。すなわちパーリ聖典は、古代インドの生活や文化を研究するための有力な資料ともなりうるのである。もちろん、近代の歴史的研究からすれば、パーリ文献は様々な時代にわたって作られたもので、そのため様々な社会状況を反映していることも事実である。パーリ聖典、その中でも特に佛陀在世直後の時代に形成されたとされる経藏と律藏は、歴史的人物としてのゴータマブツダの人となりに関連する時代の社会情勢をみるために、確実な根拠になる主要な資料である。

この先駆的研究で、著者 Narendra Wagle 博士は、当時の社会的構造を分析することによって、この時代のインド社会を描写しようと試みている。すなわち、居住のある形態を基礎に、村や町の居住形態やその相対的意義を表わし、そこに於て行われた様々な生活や文化を人間関係を詳しく分析することによって見事に大成し、更に彼は、その時代の家族関係や経済生活の面まで追究していったのである。

著者は、その時代の文学的典拠を通じて、社会の構造を調査することに特に独創力を示した。そして、そのテーマ論述の様式はまたユニークなものである。それは、彼が歴史的社会的な法論を同時に使い、そのデータを分析的に提供したということである。その様なところに、著者の親しく師事したという A. L. Basham 教授は、本書の前書きに次の様に言う。

「彼は多くの点で、その時代の生活描写の像を我々に強いて改宗させるような多くの価値ある結論を創造した」と。(pp.

vii~viii)

とまれ、パーリ聖典の歴史的研究は今までに数多くなされてきた。それ以来、この龐大なる資料は、人々の前に次々とその姿をあらわしてきた。そしてその中の阿毘達磨論書や註釈などの一部を除いて、その翻訳も一応完成し、内容も紹介され、パーリ聖典は一応研究されてしまったとの見方さえもある。しかし、それとて、その研究の中心はやはり宗教的・哲学的内容についてのものではあつた。ところが、ここに於て、佛教をもっと大局的な見地から、大きくインド文明の中の一つの社会的な姿として見てゆこうとする新しい研究方法が示されてきたのである。この意味からするならば、パーリのニカーヤや律の中にも、無限の研究分野が埋もれているのである。

二

序論に於て、著者は本書著作の意義とその方法論について詳しい解説をする。著者はその冒頭に、「この研究の中で我々は、佛陀の人となりと直接に関連する時代の社会構造についての研究成果を紹介する」(p. 1)と表明している。その方法は、社会科学のそれにならつて、パーリの資料にあらわれた佛陀時代の社会の種々の形態をそれぞれの立場から分析することである。もちろん、この種の研究には自ら限界のあることも事実である。というのは、資料としてのパーリ聖典は、主として宗教的・哲学的・文学的なものが殆んどであるからである。すなわち、聖典の伝承者は、聖典を教法の伝持のために伝えたのであり、決して社会的資料を残すために伝えたのではないのである。そ

れは佛教の他の分野を研究する上に於ても同じような限界として提出される問題である。

その様な資料的価値の面で、經典史の研究はこれまた欠くべからざる重要な研究分野であろう。その經典史の研究成果からして、佛教社会人類学を研究せんとする者の前に提供される資料としては経と律に限定することが出来る。著者はその中から特に次の六種の資料を選択している。その理由は、次の資料は佛滅後一〇〇年間のことに關するもので、佛陀時代の社会の様子を比較的忠実に伝えているからという。

- (1) Vinaya 佛陀時代の比丘や比丘尼の生活規律と佛伝物語。
- (2) Dīgha-nikāya 社会的資料と宗教的訓誡を与える物語や説法。
- (3) Anguttara-nikāya 社会構造や宗教的教説の数的カテゴリー化。
- (4) Majjhima-nikāya 社会や儀式優越へのバラモンの主張をあつかう宗教的哲学的論議。
- (5) Saṅgaya-nikāya 佛陀と交渉した人々の生活行為、集団の様相、個人の生活。
- (6) Suttantapāṭa 社会状況の集約、宗教的教義を含む偈文。(pp. 3-4)

著者はパーリ資料の中から以上六種に特に限定して、それを詳しく分析的に研究する方法を生みだした。そして、おそらくこの種の歴史的研究では始めての試みである社会人類学 (social anthropology) の原理を用いたのである。

社会人類学とは文化人類学のうち社会組織に関心を集中する研究を言い、種々の型の社会を組織的に比較研究することにより、人類社会の本性を探求する学問である。社会人類学者は次の様に主張する。

社会制度の機能とは、社会生活全体に対する貢献・役割、その必要な存在条件への一致である。それは心理的要求にではなく、社会構造の維持・促進に関わるものとされる。また、人間行動で直接に観察されるのは文化という抽象ではなく、相互に関係する人々の行動である。人々は人間関係の複合態すなわち社会構造により相互に結びつけられている。この構造の持続的・恒常的な形式を理論的に抽象し、分析・比較するところに、社会構造は、彼にとって、氏族・部族など持続性をもつ社会集団のみならず、親族構造などの人と人との社会関係、および、男・女・支配者と平民の地位など社会的役割による個人・階級の分化の諸側面を含む複合的全体である。(有斐閣「社会学辞典」、東京・一九六九、三六二―三六三頁)

この社会人類学は、もともと未開民族の機能主義的研究を契機として発展した学問であるが、この原理はそのまま現代社会においても通ずるものであり、ここに歴史的研究における社会人類学の重要性が叫ばれるようになった所以がある。

三

この様な社会人類学の方法論で研究を進めていくとき、ここに二つの重要な問題が提出される。その第一は、社会学の研究

で現代の人類学に役立つ方法は何かということであり、第二は、社会人類学より詳細な特質は何かということである。この二つの問題を究明するためには、社会現象の研究ということが近道である。その社会現象ということとは社会的構造のことであり、これはその当時のあらゆる社会現象、例えば、社会関係・芸術・宗教・文明などの詳しい分析を通じてのみ明かになるのである。ここに於て、社会構造分析方法の詳細な特質についての検討とその批判がなされなければならない。それは、具体的には、個人や集団との間に交わされる種々の形態の分析である。ここで先ず問題になるのは、社会構造に二つの要素があるということである。その第一は社会の状態であり、それは具体的には僧伽の定住した場所を詳しく調べることによって明かになる。それが第二章の内容である。第二の要素はそこに見られる人間関係であり、それが第三章において詳しく究明される。

第二章「住居の形態」は、社会における人間関係を理解するために、その人間関係のなされる場所との関係を先ず明かにすべきであるとの立場から論究される。それは、具体的には、佛陀やその弟子達が生活した村や町における彼らの生活として見出される。その生活の分析、つまり住居の形態を分析することによって明かになろう。

彼らの生活のなされた住居は、經典の上には様々な形で見出され、著書はその一一を残らずここにあげて、その定義とそこに行われた生活の様子を資料をあげて解説している。例えば、gāma (村落)・nigama (町)・pura (市)・nagara (都市)、

janapada (田舎)、更に Magadha 等の国に至るまでの分析がなされる。

ここで注目すべきことは、これら様々な場所が資料によってはっきり定義づけられているという点である。例えば我々は、pura と nagara の相違については唯概念的にしか理解していなかった。しかし、本書によってそれをはっきりと区別することができる。また、nagara は都城として、城壁に囲まれた都市として理解されていたが、ある場合には城壁のない nagara もあることを資料によって指摘している (p. 24)。あるいは、gama における家族関係やバラモン集団、また特に janapada における人間関係を詳しく論じて次の第三章への橋渡しとしてゐる。著者は、「社会文化的地方としての janapada の意義は特に重要である」(p. 35)と強調するのである。

以上第二章で述べられた様々な諸地域においてなされた種々なる内的人間関係を明さんとするのが第三章、「社会集団と階級」である。ここは本書の中心ともなるべきところであり、この中に著者の傾けた異常なまでの情熱が伺われる。

ここでは、佛陀時代の社会集団における様々な社会的身分が列挙され分析される。その身分には佛陀・バラモン・居士 (galapati)・王・村長 (gamani)・比丘・ウパソク等種々のものがあり、それらの間に交わされる社会的関係・宗教的関係・政治的関係などが詳しく述べられる。それらの関係について、資料の上では、お互いの間に交される呼び名を調べることが近道である。資料におけるその実例が Appendix である (pp. 191

~301)。ここでは、資料の上に現われた、呼びかける者と呼びかけられる者との間に交された呼称が、実に三三九例も分類的に列挙されている。この部分は実に精力的な労作である。従って、この部分の資料的価値は高いと言わねばならない。

この分類によると、佛陀がバラモンに対して呼ぶ場合は Brahmana、比丘やウパソクに対しては直接に名前を呼び、比丘同志のお互いの呼名は avuso であるというように呼称が定形化される。すなわち、資料にみられる対人関係の呼称によってお互いの身分がはっきりするのである。この付録における分析の成果が第三章の内容なのである。

以上の様な社会構造と人間関係の問題を、社会人類学的に更に追求するならば、次の三つの問題が提出されるであろう。その一は社会における役割としての人間関係、つまりロールプレイの問題であり、その二は社会における人間関係の機能の問題、第三は社会的連繋の問題である。その第三の問題について、経済構造に対する血縁関係という大きな問題が出てくる。ここに第四章と第五章が成立する。

第四章「家族関係と結婚」は第三章における社会的人間関係の特殊化といっても良いであろう。在家者にとって、家族関係は社会関係以上に大きな問題であろう。家族関係は社会における人間関係の最小単位であるとともに、あらゆる社会関係の基礎ともなるのである。それだけにそこには愛憎の渦巻く深淵もある。有名な王舎城の悲劇の物語はこのようなところに生れたものであろうか。佛陀自身も、この血縁関係に最も悩まれた人

であった。

その様な立場から、ここでは、親子・兄弟・夫婦などの関係が資料的に究明されている。更に、家族以外の親戚関係や近親相姦の問題にまで及んでいる。そして、その家族関係の根底にある結婚問題について論究され、*muhuttā* (一時的夫婦関係) から *evāha-vivāha* (嫁取り嫁やり) に至るまでの当時の色んな結婚の形態、そして血統・家系・皮膚の色・血縁からカーストの問題にまで及んでいる。

以上の様に、佛教社会の人間関係で最も重要な部分を演ずるものは血縁システム、その中でも特に家族関係であった。その家族は経済関係の位置づけを左右するものであり、生産分配活動に従事している家族が経済活動におけるグループとしていかなるところでその機能を果しているかということを究明しようとするのが、最後の第五章「職業の区分」である。

四

以上、本書の内容を紹介した。本書を通読して先ず感ずるところは、その方法論が非常に先駆的な試みであるにもかかわらず、論旨が実によくまとまっているという点である。そして、序論に於て研究の方法を論じ、本論を、社会構造と人間関係の二面から追求して、それを第二、第三章とし、人間関係の中で血縁関係と職業の問題を特に論究して第四、第五章にしたということとは実に無駄のない見事な論旨の展開と言わねばならない。

なお、かくまで綿密な研究が成し遂げられたということは、

ひとえに、著者の大胆な資料の選択によるところ大なるものがあると言わねばならない。このことは、今後我々が佛教を研究をする上に、有益な示唆を与えるものである。我々が佛教を研究しようとして、先ず戸惑うことは、その資料の龐大さにあるところが、著者は、佛教社会学の研究には最も重要な資料とも思われるジャータカをさえも、資料的に新しいとの理由で、故意に資料にすることを避けているのである。

しかし、このことは、逆に言えば本書の短所ともなっているかとも思う。著者は先ず資料選択の基準に資料の新旧の問題をあげているが、著者が特に選んだ六種の資料の中でも、最近の經典史研究の成果からすれば、そのすべての部分がジャータカより古いということにはならない。同じ様なことが六種以外の他の經典についても言われるのであろう。も一つ言うならば、著者の選択した六種のパーリ聖典以外のパーリの資料にも、あるいはまた、大乘經典の中にも当時の社会状況を知る上に貴重な資料がある。勿論、資料の限定ということは研究上やむをえないことであるが、更にこれを根拠として、それ以外の資料の經典史の意味をよく吟味して、ここに出た成果と照してみれば、業も要請されるであらう。ともあれ、著者は歴史的研究に自ら限界のあることを認めつつ、「願わくば、以上述べたアプローチとテクニクが歴史的研究の新しくして興味深い方向を示すものとならんことを」(p. 10~11)と述べる。

また、本書は当時の社会状況の分析と分類に終始した論文である。言いかえれば、その分析の成果をある目的のために応用

しようとするにはあまり重点をおかなかった様である。人間誰しも幸福を求めんとする。その人間関係の間にも当然そういう努力がなされたであろう。しかし現実の対人関係というものは醜さに充ちたものであった。その社会的人間関係の中に幸福という適応の道を追求しようとするがケース・ワーク関係である。そこに宗教の成立した地盤があるのでなかろうか。ここに分析された様々な人間関係の中に、更にケースワーク関係の

究明というものも望まれてよいであろう。

本書は、原始佛教の研究者のみならず、広く佛教というものを具体的社会構造という点から理解せんとする者にとって必携の書物となるであろうと考える。

(Narendra Wagle: Society at the Time of the Buddha, Popular Prakashan, Bombay, 1966, pp. 314.)